

小学校における英語教育

アンケートによる教員の意識調査と実践に伴う諸問題

大坪喜子* 水上尚子** 村田潤一***

(平成14年10月31日受理)

Current Issues in English Language Education at Elementary Schools

From the Viewpoint of Elementary School Teachers

Yoshiko OTSUBO Naoko MIZUKAMI Junichi MURATA

0. はじめに

2002年度から小学校においても、「総合的な学習の時間」における「国際理解教育」の一環として、「たとえば英会話などを実施できる」という学習指導要領に従って、英語を教えることができるようになった。また、依然不透明な部分も多々あるけれども、将来的には、正式に教科として英語が導入される可能性についても議論がなされているようである。このような状況において、これまで、主として英語教育を専門とする人々から授業内容・授業方法等に関する提言がさまざまな形でなされている。

本稿の目的は、視点を小学校現場の教員の立場に置き、小学校教員の現状を把握することにある。このため、まず、その実施を目前にした2000年度の段階で小学校教員にとって何が問題であったのか、また、どのように対応しようとしていたのかについて、アンケート調査の結果及び分析の形で示すことにする。ついで、そこで提示された諸問題を解決するための糸口として、小学校教員に求められる英語力の範囲及び小学校英語教育のあり方について Krashen の理論及び松川 (1997) を背景にして検討する。そして、最後に、その実施が始まって間もない段階で、小学校教員たちはどのような状況にあるのかを8月に実施された研修会参加者のレポート等を参考にして探してみたい。

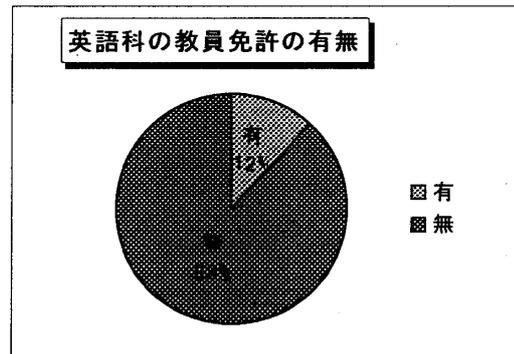
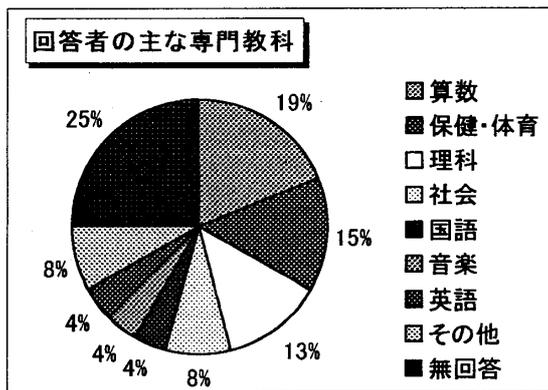
以下、Iでは、2000年度に小学校教員に行なったアンケート調査の集計結果とその分析を示す(水上担当)。IIでは、日本人教員が小学生の英語教育に携わる場合の教員に求められる英語力について、ついで、IIIでは、小学校の英語教育のあり方について検討を加える(II・IIIは村田担当)。そして、最後に、IVでは、2002年8月27日に行われた長崎県教育センター主催、「公立学校20年経過教員研修会 {選択講義: 英語科教育・英語教授法・World Englishes} (大坪担当)」で、小学校における英語教育の基本的な考え方について学習した後に書かれた小学校教員の研修レポート等を参考にして、小学校における英語教育に対する現場教員の現在の取り組み方・考え方を示すことにしたい。

I. アンケートの調査の集計結果およびその分析

1. アンケート回答者内訳

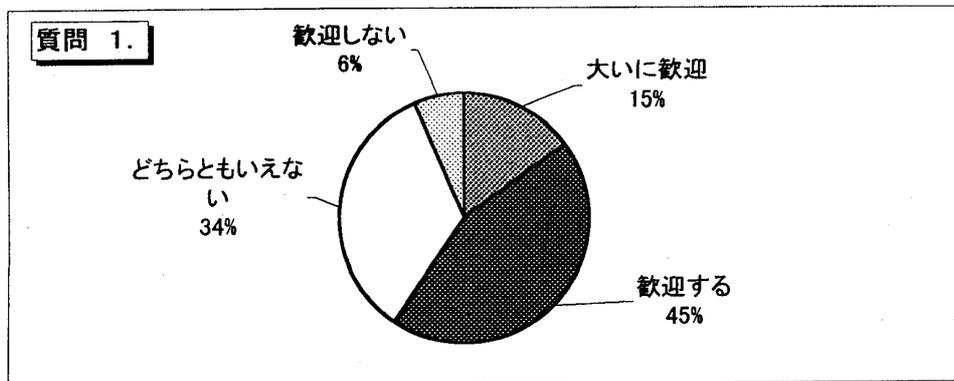
このアンケート調査は、現職の小学校教員を対象に行なわれたものである。特に、長崎大学卒業生、大宰府市立大宰府東小学校、長崎市立西坂小学校、長崎市立伊良林小学校の先生方にご協力いただいた。大宰府東小学校、西坂小学校では形に違いはあるが既に国際理解教育が進められている。アンケートは全部で100部お願いし、そのうち59部の回答があった。アンケートご協力者内訳は以下のとおりである。

	男性	女性	回答なし	
20代	2	3	4	9
30代	10	12	10	32
40代	6	4	4	14
50代	2	2	0	4
	20	21	18	59



2. アンケート回答結果

質問1. 「総合的な学習の時間」の導入を歓迎しますか。



～理由～

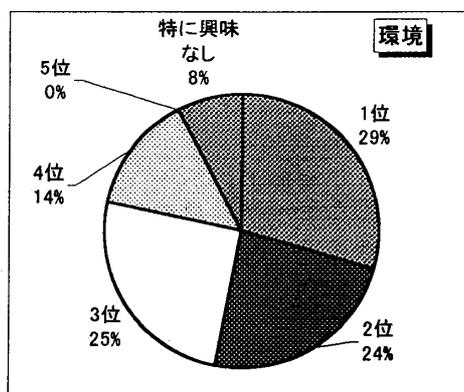
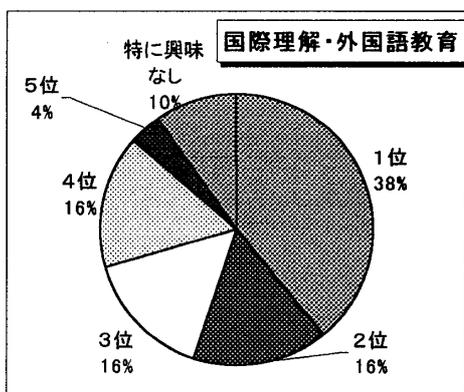
大いに歓迎…教えられたことを覚えるだけではこれからは不十分・失敗を繰り返すなかで学び方を学べる・子ども達中心の教育・子ども達の主体的な学習・学ぶ楽しさ、目的、成果が自覚できる・生きるための知識や能力を身につけられる・知識重視の体質を変えられるのではという期待感から・自ら学び、体験し、楽しみながらの学習ができる・教師の支援者としての本当の役割ができる・今からの小学校に必要なものである

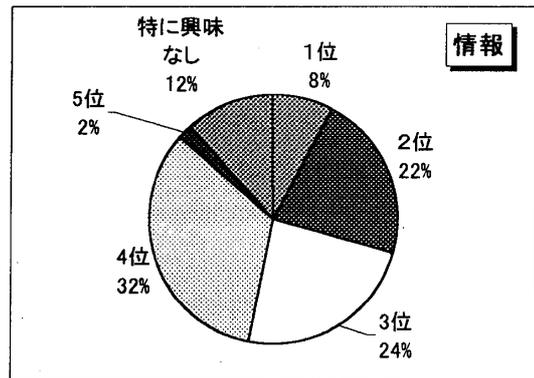
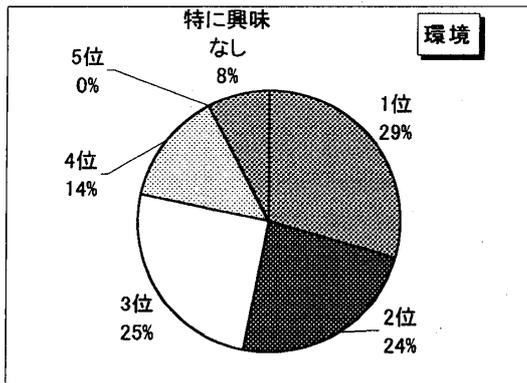
歓迎する…教科書や学校という枠を越えることができる・様々な人やものに触れとしての幅、視野が広がる・学校の独自性、地域性、教師の個性を発揮できる・保護者の要望に応えられる・自分でやりたいことを選んで子ども達が自主的、主体的に学べる・子ども達の思いや願いを生かせる・子ども達の実態に合わせられる・子ども達と一緒に教師も学べる・開かれた学校づくりができる・教科で学んだことを生かせる・教科で学んだ知識を総合的に働かせる・知識を身につけるだけでは駄目・生活経験が乏しくなっている今、教師が仕組んでやる必要がある

どちらともいえない…準備不足・ねらいがはっきりしない・総合的な学習を新設しなくても今のままで十分・従来の教科（特に社会）との違いがはっきりしない・学校、地域間の格差がある・教師が手を抜こうと思えば抜ける・基礎基本の重視の考えに矛盾し、基礎学力の低下に拍車がかかる・導入に伴う他教科の時間削減に反対・今でも忙しいのにさらに教師の負担が増える・総合的な学習にばかり目が向く・意味合いが広すぎ、理想が高すぎる。質が伴うか心配

歓迎しない…基礎、基本の徹底が果たせなくなる・今までの教育課程でも「生きる力」は身につけられる

質問2. 「総合的な学習」を始めるにあたって示された4事例「国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉」のうち、どの分野を子どもに学ばせていきたいとお考えですか。（回答にあたっては四事例にその他のアイデアを加えて、興味がある順に1～5の順位をつけて頂いた。）





その他のアイデア…地域（4名）・生命教育・人権・平和・健康・自然科学・歴史・体験学習
（無回答…7名）

～理由～

国際理解・外国語会話…外国との交流が日常化されている今、世の中を生きていくために重要・21世紀の教育の基礎基本となる・日本人が国際人として活躍するために生きた英語を身につける・コミュニケーションをする楽しさを小さい頃から身につける・自分も子どもも学びたいと思っているから・日本の文化を見つめるため・異文化理解を図ることで道徳の思いやりの教育など様々な取り組みができる

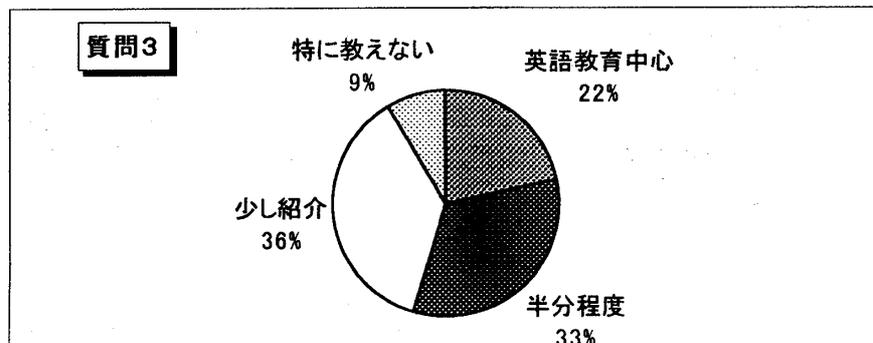
環境…生命に関わる問題だから・地球全体の課題として、地球の一員としての役割を果たす必要がある・子ども達の身近にある問題を認識して欲しい

福祉…高齢社会、核家族化の現状で学ばせる重要性を感じる・人との関わりや思いやりを重視したい

情報…学ぶための手段として最初に行うべき・マルチメディアに対応することは重要・今の総合学習を進める上で、パソコンによる情報収集、処理は必要不可欠

無回答…子どもの興味、関心を一番に考えるから・児童の主体性がすべて

質問3. 国際理解教育をするとしたら、どの程度外国語(主に国際語としての英語)をとりいれますか。



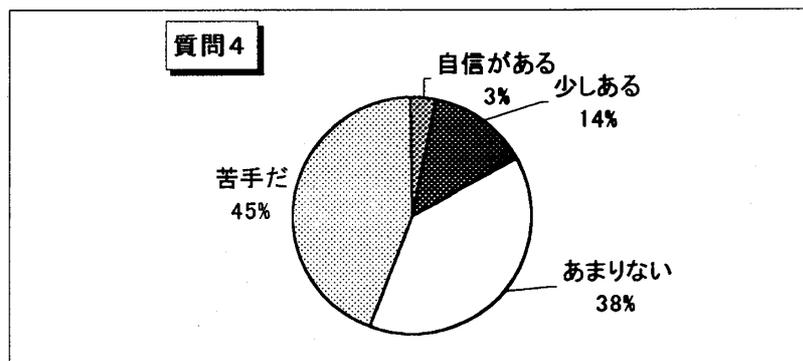
英語教育中心…今後、英語が児童にとって役に立つものとなるであろうから・有用度が高い・とりあえず研究を進めるため・コミュニケーションをとれずして本当の国際理解はできない

半分程度を英語教育に使う…外国人差別の問題など言語教育以外にも教えたことがあるので、特に英語でというのは難しい・英語を学ぶことを通して文化や思想を学ばせたい・子どもの英語に対する拒否感お考慮に入れて・英語を学ぶ意欲を持たせるのが目的・外国のことを学ぶのに言葉は欠かせない

少しは紹介する…小学校では英語は触れる程度でいいと思うから・外国の生活や文化に親しませるような体験を重視したい・日本語をしっかり勉強して欲しいから・英語嫌いをつくりたくないため・簡単な使える英語を教えていきたい

特に教えない…挨拶や色、動物の単語など必要最小限の言葉のみでよいと思っているから・異文化教育＝言語教育ではないから・子どもの方から要望があれば多少は教える

質問 4. 英語力に自信をおもちですか。



英検 準1級…1名 2級…1名 3級…2名 4級…3名
TOEFL 590…1名 米国現地中学校二年間勤務…1名

質問 5. 国際理解教育を行うにあたって、どのような目標を考えますか。

(回答は、以下の8つの目標を示し、その中で重要だと思われる順に順位をつけて頂く形をとりました。)

集計の結果から重要だと先生方が思われている順に並べると、以下のようになりました。

1. 異文化を理解することで差別・偏見のない社会の形成者を育てる。

理由～英語が出来るというのは人が豊かになるための手段だから、どんな人間になろうとしているのかが大事・国際理解の基本は自分との違いを認め合うことだから

2. 世界に目を向け広い視野で物事をとらえることができるようになる。

理由～世界中にはいろいろな人がいることを知って欲しいから・日本人は視野が狭いとつねづね考えているから

3. 自分を積極的に表現する主体的態度の育成

理由～日本人の欠点である消極的な態度を改める・英語教育を自己表現力、豊かな心の育成につなげることが大切・大人になってからでは心の壁を取り払うのが難しいから、自然な心の交流ができるようにしたい

4. 英語を積極的に使ってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

理由～英語を教えこむのではなくコミュニケーション能力を伸ばしたい・日本人は自分を表現するのが下手だから、英語を通して自然に自分を表現できるようにしたい・技能面は態度が身につけば自然に身につけてくるものだから

5. 英語に触れ、慣れることで英語に対する抵抗感をなくし関心を持たせる

理由～抵抗感をなくし技能に結びつけるのが順序だと思うから・総合学習や国際理解教育にはあまり多くの期待をしてはいけないと思うから慣れる程度でよい

6. 英語を話したり、聞いたりするコミュニケーション能力の育成

理由～文法を気にせず、何とかコミュニケーションをとれることを目指したい
・相互理解のためにはコミュニケーション能力が必要・コミュニケーション能力が身につけば、もっとこうなりたいという希望や可能性がでてくるから

7. 大人になってからでは難しいといわれる音声教育をする

理由～小学校の段階ではまず音声に慣れることや、英語に興味を持つことを大切にしたい

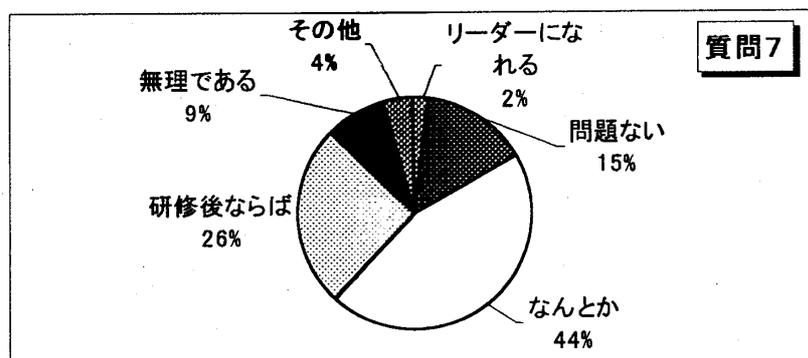
8. アルファベットに慣れ親しみ、簡単な文を読めるようにする

その他 自分・自国理解…真に国際人を育てることは無国籍人を育てることではない。
自分がどんな国に住んでいて、何を考えているかをしっかり持っている人間を育てることが基本だ

質問6. 教師自身の英語力を伸ばすために、研修を受けること以外にどのようなお考えをお持ちですか。(回答は14の事例を示し、当てはまるものすべてを選んで頂きました。)

- | | |
|--|------------------------|
| 市販の本やCDを購入して学ぶ (47%) | 英検などの資格試験を受ける (11%) |
| 英会話学校に通う (34%) | 映画をみて学ぶ (34%) |
| 地域の外国人の方と交流をもつ (53%) | 英字新聞や雑誌を読む (24%) |
| 教師どうして英語を話す練習をする (14%) | 英語の音楽(洋楽)を聴く (34%) |
| NHKなどの英語教育番組を見る (31%) | 海外での研修プログラムに参加する (24%) |
| 朝の朝礼で、英語で挨拶をするなど学校ぐるみで取り組む (27%) | |
| 海外旅行をする (29%) | |
| 特に何もしない (3%) …何とかする時間がない・英語を勉強するためには何かを削らなければならない、それは必ずしも教師としての資質を高めることにはならない・しようとは思いますが実現できない | |

質問7. 将来本格的に英語教育が始まった場合、授業をすることは可能ですか。



積極的に周りを指導し、授業を展開させることができる

理由～独学で勉強した経験から、自分なりの方法で指導できる

特に問題なく授業できる

理由～先生方は皆努力家だから

周りの先生と協力しながら、なんとか授業できる

理由～日常的なものなど慣れ親しませる程度ならできる・ALTの援助やビデオ等普及しているのでなんとかなると思う・本格的にスタートすれば教材会社がよい商品を開発してくれると思う・英語専門の教師と共にでないといふ発音に自信がないので不安・教科制ではないので担任に時間がかかる

研修などで基礎知識を身につけてからなら授業できる

理由～英語は得意としているが、教え方など研修で学ぶ必要がある・自分が受けた英語教育と、今求められている小学校での英語教育には大差があり経験が生かせない

自分では無理なので他の先生に任せる

理由～力量不足を簡単に補うことは出来ない・児童を英語に慣れさせ、楽しく関わらせるためには、かなりの力量が必要・指導内容や方法が不明瞭なので研修を深める必要がある・英語が苦手だから

その他～可能にせざるを得ない

理由～「できません」で済むことではない。やるならば職員全体でやらなければならない

質問8. 子ども達に英語を習得させるためには、週に何回、何分授業をするのが最適だとお考えですか。

週に1回 45分～50分…他教科の授業時間数を確保するためには週に1回が精一杯・楽しみながらやるにはこれくらいがよい

毎日 10～20分…日常英語を使う場を得にくいので意図的に機会を与える・習慣化が大切・身につけさせるためには、色々な場で英語を使うことが大切

週に1～2回+毎日10分…毎日英語を聞く機会と意図的に扱うものを組み合わせて・

週に2回 45分…週一回では少ないから・他教科とのバランスを考えて・これ以上は無理

週に3回 45分(10%)…専科の先生に任せる場合・英語習得にのみ目を向けた場合

週に2回 10分…慣れ親しむ程度でよい

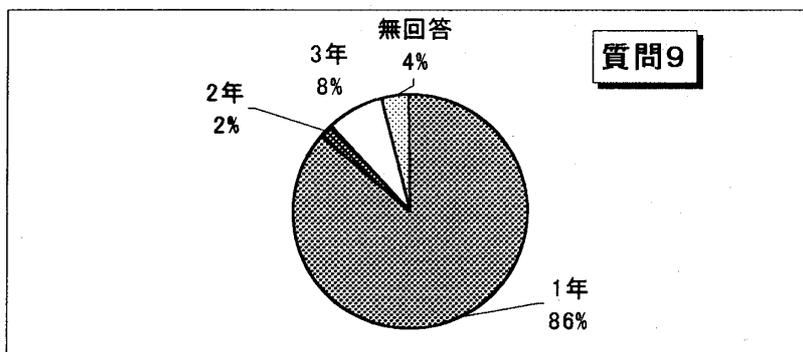
週に2回 90分…英語を習得させるためならばもっと必要

毎日最低30分…接する機会は多ければ多いほどよい

週5回 45分…現状では不可能だが、多ければ多いほどよい

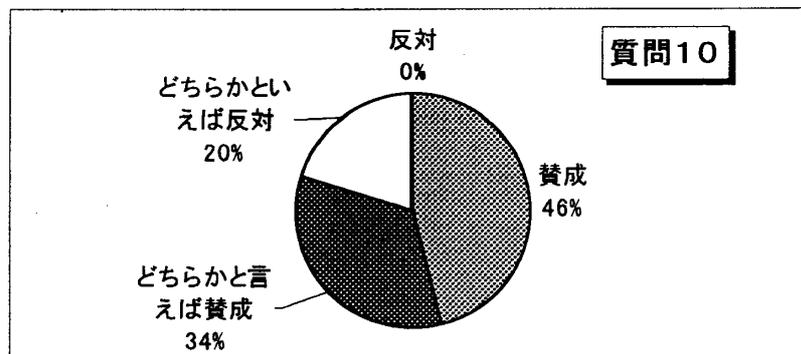
無回答(14%)…始まったばかりなのでよく分からない・他教科がひしめいている中、英語ばかりを優先できない・保護者や社会が小学校という現場にどこまでの英語教育を要求しているかわからない

質問9. もし英語教育を取り入れるとしたら、何学年から始めるのがより効果的だと思いますか。



- 1 年…取り入れる時期が早いと抵抗がなく、恥ずかしがらずスムーズに取り組める・楽しい活動を早い時期から少しずつやっていく・発音の面から・頭が柔軟・時期をはずすと言語習得に何倍もの労力を要する・学校生活の中に身近に取り入れるなら1年から
- 2 年…なし
- 3 年…1・2年は学校に慣れ、日本語の基礎、基本を学ぶ時でとても大事な時期・少し溶融ができる3年から・理解度がある程度高まってから・英語と日本語を混乱する子もいる

質問10. 個人的な意見として、英語教育を小学校に導入することに賛成ですか。



賛成…これからの社会、環境で生きていくために必要不可欠・早く始めたほうが使える英語を習得できる・文法やスペル以外の積極性、態度を早くから育てる・中学校にはいつからでは遅い・音声教育の面から早い方がよい・外国の文化に触れる機会があることは素晴らしいとおもうから

どちらかといえば賛成…英語や外国の方と慣れ親しむという視点の英語教育であれば導入してもよい・必要だとは思いますが日本語も教えていかなければならないので両手をあげては賛成できない・学校はただでも多忙だが、これからの英語教育を考えると英語教育も大切・必要性は感じるが負担が大きい。専門職として人事を配置すればよいが、おそらく予算の面で無理

どちらかといえば反対…まずは国語などの基礎基本を身につけるべき・導入のあり方、つまり一斉導入ではなく選択の余地など検討の必要がある・英語教育によって外に目を向ける前に、地域の一員として生きることが出来る子どもを育てたい・ねらいが不明瞭・他の学ぶべきことも定着していない今、これ以上子ども達にできるかどうか心配・中、高の準備として保護者が考えていることに疑問がある

どちらともいえない…やり方次第で効果があるし、逆に中学校に入る前に英語嫌いをつくる可能性があるから・準備があまりできてないまま始まったような気がするから・その学校、その学校 教員の技量にかかっているような気がするから

質問11. 国際理解教育の教材としてどのようなものをお考えですか。

- | | |
|---|--|
| <input type="radio"/> 外国の方との交流 (14%) | <input type="radio"/> ダンス (5%) |
| <input type="radio"/> ゲーム (8%) | <input type="radio"/> 簡単な単語や挨拶の紹介 (5%) |
| <input type="radio"/> 絵本 (7%) | <input type="radio"/> 英語劇 (2%) |
| <input type="radio"/> 外国の衣服、住居、食文化 (7%) | <input type="radio"/> 写真や絵 (2%) |
| <input type="radio"/> 歌 (5%) | <input type="radio"/> 生教育と結びつけた問題 (2%) |
| <input type="radio"/> CDやビデオ (7%) | <input type="radio"/> 国語や道徳の教科書 (2%) |
| <input type="radio"/> テレビ番組 (5%) | <input type="radio"/> 国際的な話題 (2%) |
| <input type="radio"/> インターネット (5%) | <input type="radio"/> 校外での活動 (2%) |
| | <input type="radio"/> カード (2%) |
| | (無回答…44%) |

質問12. 国際理解教育をするにあたって、地域や学校の特性を生かしてどのような活動をおこないますか。

- 地域の外国人の協力 (17%)
 - 地域の英語を勉強している大学生の協力 (8%)
 - 地域の知識や経験がある方に手伝ってもらう (17%)
 - 地域の日本文化を実体験する (2%)
 - 地域の異文化を体験する (2%)
 - 地域の祭りから学ぶ (2%)
 - 人材バンク等での交流 (2%)
- (無回答…47%)

質問13. 英語教育導入に伴って起こりうる問題点は何ですか。また、授業を行うにあたっての不安はございますか。

- 人員不足 (17%)
 - 発音の問題 (8%)
 - 他の授業とのバランス (17%)
 - 教師の英語力の向上 (15%)
 - 中学校英語教育との連携のとり方 (5%)
 - 目的の不明瞭さ (5%)
 - 評価の仕方 (5%)
 - 西洋にばかり目が向くこと (3%)
 - 実態の伴わない英語ブーム (3%)
 - 近隣の小学校に対する保護者の苦情 (2%)
 - 道徳性の問題 (2%)
 - 「開かれた学校」のあり方 (2%)
 - 英語が必要な理由がよく分からない (2%)
 - どうしても他の教科との壁を感じる (2%)
- (無回答…17%)

II. 小学校教員に求められる「英語力」

きわめて常識的なことであるが、外国語を運用する能力に上限はない、ということをはじめに確認しておきたい。つまり、「これで完璧」という英語力はないし、能力の保持も含めて、学習はほぼ永遠に続くのである。したがって、ここでは、小学校で英語を教える際に最低限求められる「英語力」について考察してみたい。

結論から言うと、中学校卒業程度で十分である。ただし、4技能をバランスよくマスターしたという条件つきである。ここに一つの問題がある。すなわち、ほとんどの場合、一人ひとりの小学校教員が受けた英語教育が十分でなかったために、いびつな「英語力」、言い換えれば、「英語に関する知識」しか残っていない、という点である。とりわけ、「聞く、話す」という技能にゆがみが大きく、また、そこに不安を感じている教員が多いように思われる。そのことは、アンケートにおいて「英語でコミュニケーションをはかる力を子どもたちにつけさせたい」という願望を持っている回答が多いという事実からも逆に推測することができる。つまり、「そうさせたいのだが、それができない」のである。言いかえ

れば教員たちの念頭にある「英語力」とは主として「英語を聞いたり、話したりする力」である、と言ってよいだろう。それは、松川（1997）の「どこでも強調されているのは、中学校英語とは違うものをということ、オーラル・ワーク中心ということ、文法（あるいは言語材料）重視をさけること」という指摘とも呼応する。では、その不安を解消するにはどうしたらよいのだろうか。まず、「音声を中心とした英語」の指導に自信を持ってもらうための具体的方法を考える必要があるであろう。

そのために、ここで、英語の音声について概観し、発音上注意すべき部分を抽出してみたい。英語の音声は個々の「音」と、「アクセント」およびそこから派生する「リズム」（また句や文の単位まで拡大すると「イントネーション」）の二つに大別される。前者はさらに「母音」と「子音」に分けられる。英語（ここではアメリカ英語に限ることにする）の「母音」を日本語の類似した「音」と対比させると次のようになる。（便宜上、具体的な単語をあげ、下線を施すことにする。）

(1)	A 群	B 群
「ア」に聞こえる音	cat, <u>cut</u> , hot, <u>away</u>	<u>park</u> , <u>bird</u>
「イ」に聞こえる音	<u>sit</u>	<u>seat</u>
「ウ」に聞こえる音	<u>pull</u>	<u>pool</u>
「エ」に聞こえる音	<u>bed</u>	<u>cake</u>
「オ」に聞こえる音		<u>bought</u> , <u>boat</u>

まず注意しておきたいのは、A群とB群の母音がしばしば「短母音」と「長母音」と呼ばれるために誤解をしている日本人が多いということである。両者には決定的な質的違いがあり、決して「短母音」を長く言えば「長母音」になるのではない。とりわけ、次の対立は重要である。

(2)	<u>sit</u>	<u>seat</u>
	<u>pull</u>	<u>pool</u>

当然のことながら、英語の音はすべて日本語のそれとは異なるのであるが、異なり方の度合いという尺度を仮に設定すれば、(2)においては、左側の音の方が著しく異なっている。つまり、sitやpullに含まれる母音は日本語の「イ」や「ウ」とはまったく異なり、聞こえる印象としてはむしろ「エ」、「オ」の音に近い。注意すべき母音をさらに拾い出してみると次のようになる。

(3)	<u>cat</u>	<u>bird</u>
(4)	<u>bought</u>	<u>boat</u>

細かなことになるが、日本人は母語の影響で無声子音（たとえば、[f] [t] [k]）に囲まれた [i] の音を落としてしまう傾向があることを付け加えておきたい。具体的に言うと、beautifulの下線部の音が落ちてしまうのである。この場合、[i] を落とさないためには、

[t] を有声音の [d] のように発音してみるとよい。

次に注意すべき子音を見ておこう。

(5)	foot	vase	think
	light	right	team
	sit	seat	wood

しばしば指摘される [l] と [r] の対立を比較すると、発音上問題となるのは [l] の方である。[l] の音がすべての子音の中でもっとも難しいと言ってもよい。また、[s] の音は「イ」と聞こえる母音と結びついた場合だけが問題となる。[t] の場合も同様である。最後の [w] は特に「ウ」と聞こえる母音が続く場合、発音が難しくなる。

次に、アクセントとリズムの問題を考察してみよう。実は、個々の「音」よりむしろこちらの方が日本人には難しい。というのは日本語が「高・低」というピッチ・アクセント（実際にはかなり平坦だが）なのに対して、英語は「強・弱」というストレス・アクセントだからである。言いかえると日本語の場合は「拍」が単位になっているのに対して、英語は「音節 (syllable)」単位になっているのである。日本人が英語のポップスを歌おうとするときこちなくなる大きな理由もここにある。この「音節」単位のリズム感というのは「体で覚える」必要がある。英語のリズムについては、たとえば、阿部フォード恵子ほか (2002) が「体で覚える英語のリズム」と題して、とじ込みCD付で「歌・チャンツ・早口言葉」のいくつかを紹介している。これらは子どもと英語を学ぶ時のよい教材ともなるろう。

「英語の音声」と言っても整理してみれば、かなり絞られてくる。そして「言えれば、聞けるし、聞ければ、言える」のである。さらに、新しい流れとして、“World Englishes”がある。詳しくは大坪 (1999) を参照して欲しいが、要約すると「いわゆるネイティブのような美しい英語ではなく、許容される範囲内で日本人の英語を積極的に評価しよう」という主張である。「許容される範囲」をどう規定するかという問題は残っているものの、この立場に立てば、到達目標もさらに下げられるので、もっと気楽に英語という外国語をとらえることができるものと期待される。そしてなにより忘れてならないのは、小学校で行なわれるのは「初歩的なオーラル・コミュニケーション」である点である。誤解を恐れずに言えば、教員が高度な「英語運用能力」を持っていると、小学校における英語教育が本来あるべき姿からはずれた方向に進んでいってしまう危険すらある。このことについて次節で考えてみたい。

Ⅲ. 小学校の英語教育のあり方

松川 (1997) は、岐阜県の生津^{なまつ}小学校の英語学習を総括して、「間違いを恐れず、なかなかうまくいなくても、とにかく使ってみせることのモデルに先生がなること」の必要性を指摘している。Krashen 理論の用語を使えば教員自身の「情意フィルター (affective filter)」を下げる必要があるのである。このことは、教員、子どもともども「間違い」を許容し、またそれを肯定的に評価する姿勢へ発展してゆくものと期待される。つまり、英語を学ぶことは、異なったコミュニケーションのスタイルを体験するのみならず、「正

答」ばかりを期待する日本の学校教育の欠点を是正する可能性も含んでいるのである。

また、生津小学校のもう一つの特徴は、「『国際理解教育』というものを早い時期に英語学習導入と切り離してしまった」ことにあると松川は述べている。「国際理解教育」ということばは耳にはとても心地よく響くのであるが、実際のところ、きわめて難しいものである。「違い」ばかりが子どもの心に焼き付いてしまう危険をもはらんでいる。「国際理解」ということは、長期にわたって続いてゆくプロセスなのである。

松川は、生津小学校という個別の事例から一般論へと議論を進めている。まず、小学校での英語教育の重要な論点は、「それが『適期』教育かどうかという点にある」という鋭い指摘を行なっている。そして、「初歩的なオーラル・コミュニケーションを楽しむ『適期』は、中学生時代ではなく、小学生時代だ」と明言している。この意見には高校で教えた経験からも同意する。当然のことであるが、児童・生徒の発達段階に合わせて「教育内容」は配列されるべきなのである。

また、英語を「教科」とすると教科書が必要となり、「英語嫌い」を生み出し、楽しくなくなるという発想に対して、松川は「それこそ『教科としての英語』を旧態依然のものとしてしか、捉えていない」と一蹴している。さらに、英語学習の内容について、「学習のプロセスを重視する過程志向のシラバス作りの考えに立ち、先生と子どもとの negotiation の中で決まってくる活動、経験の総体こそが学習内容だと考えることも可能」ではないかという興味深い示唆を行なっている。

最後に、松川のことばを引用してこの節を閉じることにする。

「子どもはいつも完全な文でしゃべるわけではありません。単語や句だけの発言も多いのですが、場面に即して臆せず、反応できるようになります。たったそれだけのことを教えるのに、小学校から英語を教える必要があるのか、中学校からで十分だという考えもあるでしょう。でも、現にできていないのだから、説得力がありません。「たったそれだけ」と言いますが、確実に学力をつけてやることこそ、今、学校教育全体の信頼回復のためにも重要なことなのです。」

IV. 小学校教員の英語教育導入に対する姿勢と今後の課題

これまで述べてきたことを纏めると、Iの「アンケート調査の集計結果およびその分析」では、英語教育が導入される前の小学校教員の期待と不安が入り混じった状況が提示されている。すなわち、小学生に英語を学ばせることには賛成であるけれども（質問2・3・5・）、実際に自分自身が英語を教える立場になることには消極的な姿勢が読み取れる（質問4・7・13）。特に、質問13、「英語教育導入に伴って起こりうる問題点は何ですか。また、授業を行なうにあたっての不安はございませんか。」に対して挙げられている回答項目は、その導入が不可能とさえ思われるほど、英語教育導入に対する小学校現場における教員の困惑・不安がひしひしと伝わってくるものである。II、IIIでは、そのような現場での問題点（質問4・7・13）を解決・軽減する助けとなるように、小学校教員に求められる英語力、及び、小学校における英語教育のあり方について述べた。最後に、本節では、本年度から開始された英語教育の導入に対して、小学校教員は今どのように対応しているのか、そして、彼らは今何を必要としているのかを公立学校20年経過教員研修レポートを

参考にして探ってみたい。

公立学校20年経過教員研修レポートから

長崎県教育センター主催、「公立学校20年経過教員研修会（2002年8月27日）」での選択講義、「英語科教育・英語教授法・World Englishes（大坪担当）」には、23名の登録者があり、小学校教員17名、中学校教員3名、高等学校教員3名という内訳となっていた。英語科教育に関する講義にこのように多数の小学校教員が出席するという事は、彼らにとって小学校における英語教育が現実的課題となっていることを示している。出席者一人一人の要望を尋ねる時間的余裕がなかったので、Iのアンケート結果を念頭に、小学校・中学校・高等学校における英語教育の連携を視野に入れ、「小学校英語教育は何をするのか」、「従来の中学校・高等学校における英語教育とどのように異なるのか」、「どのような教え方をするのか、そのために、教員の役割はどのようなものであるのか」等を明らかにすることを目的し講義を行なった。紙幅の都合で、講義（90分間）の内容にふれることはできないので、この講義終了後に教育センターからの研修レポート題目、『（1）この講義を受講して学んだことは何ですか。（2）1の「講義で学んだこと」をあなた自身、今後の教育実践にどのように生かしていこうと考えていますか。上記2点について、考えをまとめ記述してください。』に答えて纏められた小学校教員の意見・考えを紹介することにしたい。小学校教員の現状を直接読み取ることができると思われるからである。以下、すべての意見・考えを紹介する余裕がないので、いくつかの代表的な意見を紹介することにしたい。（*を示して、筆者のコメントを付すことにする。）

・今回の講義で World Englishes (WE) という言葉を聞き、今まで私の中にあった英語というものに対する認識とそれとが違っていることに驚き、それまで、Native のように話さないといけないと思っていたことが、そうでなくていいということで、英語に対する「呪縛」から開放されたような思いがした。また、とかく日本は外国のものに対し、強いあこがれを持っていて、すべてそれが一番よいと思いがちで、何でもその真似をするように思えるのだが、日本人は日本人らしく話せばいい。アメリカやイギリスの人が、日本人の日本人らしい英語を理解するようにならなければならないというのはとても新鮮で、それこそ真の意味での国際理解ではないのかという思いさえしてくる。そのようなWEの考え方に立つならば、これから子ども達に私自身が英語を教えるという機会があったとしても、そう気おくれすることもなく、楽しみながら英語を教えることができるのではないかと思う。（*情意フィルター (Affective filter) が大きく下げられたことを表わしている。）

・昨年、6年生を担任し、実際に英語（英会話）の授業を月2回ほどやってきたが、歌やゲームがほとんどで、内容についてもおまかせで私自身は、ただ見てるだけの立場であったため、どのような観点でということがよく分からないままだった。（指導者は2人で、1人は外国人、1人は日本人で、公民館などで英語を教えている人。）小学生だから文法的なことよりもまず、慣れる・楽しむというのが必要だということは分かっていたが、実際自分が習ってきたものとどう違うかということが分からなかった。しかし、今回の講義で、Stephen D. Krashen の理論の中で Language Acquisition（実際に使われている言葉の中から言葉をピックアップして使えるようになることを意味する）と Language Learning（学校等で文法形式等を学習し、言語を意識的に学習することを意味する）というのがあり、私がやってきたことは後者であり、小学生には、前者が必要であるということで、私の頭の中でモヤモヤとしていたものがすっと消えてなくなったようでとてもよく分かった。子ども達は英語を目ではなく、耳で聞き、単語1つ1つを聞くのではなく、単語も語句も文も、かたまりと

して聞いていく、それを繰り返すことで、自然に覚え、そのうち、1つ1つの単語がわかってくる。赤ちゃんが言葉を1つ1つ覚えていくように。1つの言語を習得していくということは、そう難しいことではないのかもしれない。やさしいことを何度も何度も耳で聞き、体験させ、すんなりと頭やからだの中に入るように、場面を工夫し、設定しさえすれば...という思いが湧いてきて、私にもできるかもしれない、私もやってみたいという思いが強く湧いてきた。（*小学校英語教育が何を指すのかがはっきりして、自信が出てきている様子が伺える。）

•WEとはいえ、やはり、子どもに本物を見せる・聞かせるということは必要なことだと思う。また、小学生の子どもであれば、やはり、その子を理解した上での配慮も必要になってくるであろうと思われる。子どもの一番身近にいる教師である私自身が、少しでも、本物にちかいものができるよう、研鑽を積んでいかなければならないと思う。まず、自分自身が、苦手意識や恥ずかしさを遠ざけて、分かるようになった喜び、話せる喜びを子ども達に伝えていきたいと思う。（*小学生にとって理想的な教師の姿が示されていることを指摘したい。Larry E. Smith氏は、日本人の英語学習者にとっての“the best teacher”は日本人英語教師であると述べ、それは、経験した学校教育でも学習者と同じ経験をして育っているから、「役割モデル」としての生徒達への影響力は大きいと指摘している（大坪（1999：12-8）を参照）。

•小学校の英語については、導入はされたものの、なにを目的にどのように教えてよいか分からず戸惑いも多い。今回の講義を受講することによってそのあたりが少し明らかになった。小学校の英語は、Language Acquisitionを目指せばいいのだ。その方法として、①場面・状況をしっかり把握させること、(here and now)を大切に、②正しい発音を繰り返し聞かせること、③無理に話させようとせず、子どもが自然に口にするのを待つこと、④ゲームや歌などを取り入れ、楽しく学ばせること、⑤実践の場面では、子どもが表現する場面を多く創ること。この他、教師として配慮することとして、①正しい発音を身に付けること、②子どもの理解しようとする活動を妨げるような日本語訳をはさまないようにすること、③子どもと多く対話の相手になってやること、なども分かり、自分がこれからやるべきこともよく分かった。（*具体的に何をするのがしっかりと捉えられている。）

小学校英語教育では、「何をするのか」を示すことにとどめ、教員の創意工夫に任せるということが、教員の創造性を生かすことにつながると思われる。生き生きと英語教育に取り組む小学校教員の姿が、あちこちの小学校で見られるのもそう遠くはないように思われる。また、小学校教員からの質問に対して、理論的根拠を示し、納得できるように情報を提供することで、小学校における英語教育はかなりの成果が期待できるように思われる。小学生の扱い方は十分に心得ている先生たちである。創造的な授業の成果を期待したい。このような研修の機会がもっとほしいという意見が多く見られたことも付記しておく。

参 考 文 献

Krashen, Stephen D. & Terrell, Tracy D.(1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. (Prentice Hall)

阿部フォード恵子他 「体で覚える英語リズム」【時事英語】2002年10月号 研究社

松川禮子(1997) 【小学校に英語がやってきた】アプリコット

大坪喜子編著(1999). 【小学校で英語を教えようー英語科教員養成の理論と実践ー】

創英社/三省堂

*長崎大学教育学部英語教育講座

**長崎大学教育学部小学校教員養成課程(英語選修)卒業

***長崎大学大学院教育学研究科英語教育専修

(平成15年4月からは福岡県内の小学校教員)